

音楽理論講座

1. 音楽の要素

音楽はメロディ・ハーモニー・リズムの3要素から構成されています。

うち、今回の講座で取り扱う音楽理論はメロディ・ハーモニーを制作するのに重要になります。この3要素はどんなジャンルの音楽にも(基本的には)存在します。ロックバンドに例えるとメロディがギターやボーカル、ハーモニーをベースやリズムギター、リズムをドラムが担当します。

2. 音の高低

音は平均律という調律法で分割されており、1オクターブ(ドから次のド)までを12分割し、名前を付けています。DTMにおいては従来まで慣れ親しんだであろうドレミファソラシド・・・よりも英語表記のCDEFGABCをよく使用します。

半音ずれた音もあり、元の音から半音上にずれたものにシャープ(#)下にずれたものにフラット(b)を付けて表記します。今は存在だけ知っていればOKです。

白鍵だけのCDEFGAB(7音)+半音ズレのシャープ・フラット(5音)で構成されています。(はじめは黒鍵のことは考えず、白鍵だけで作曲するとミスが起こりにくいです。)

言語	音名							
イタリア語	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
英語	C	D	E	F	G	A	B(H)	C
ドイツ語	ツェー	デー	エー	エフ	ゲー	アー	ベー(ハー)	ツェー
日本語	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ	ハ

3. 音階(スケール)

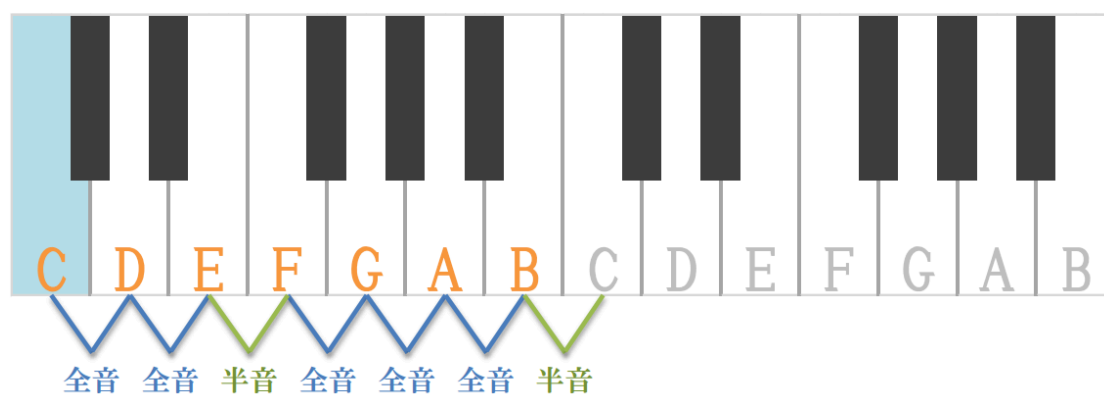
平均律により分割された音をいくつか取り出して、人が気持ち良いと感じる音の流れを作ったもの。スケール内の音だけを使うことで不協和音などを避けて作曲することができる。

メジャースケール、マイナースケールの2つを覚えておくとよい。

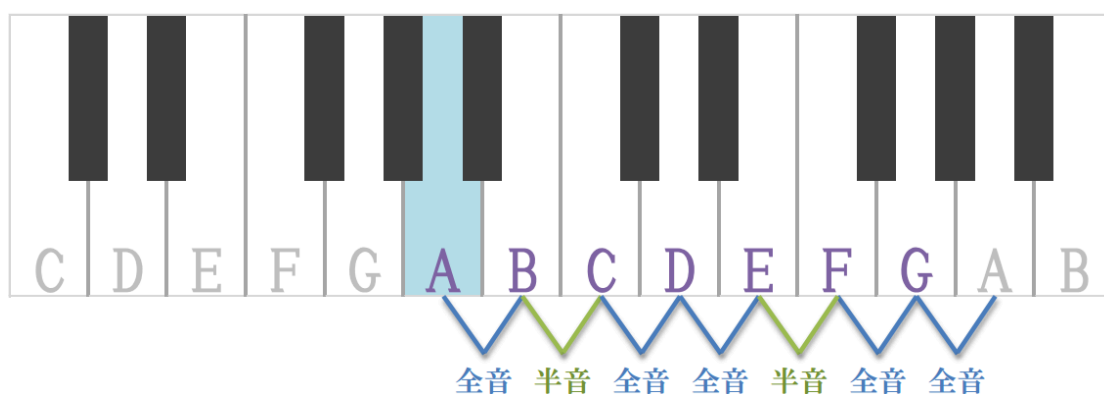
前者は明るく活発な響き、後者は暗く叙情的な響きを持つ。作りたい曲によって使い分けるとよい。

スケール名の接頭辞に、始まりの音が表記される。(ex.C メジャースケール)

メジャースケール(C メジャー)



マイナースケール(A マイナー)



上に挙げたCメジャー、Aマイナースケールはどちらもピアノの黒鍵を使わずに演奏できるので、はじめはこのどちらかで作曲するとよい。

また、始まりの音を鍵盤上でずらしても機能するので気分を変えたくならずらしても使える。

4. コード

スケール内からさらに数音を取り出して重ねて鳴らした音をコード(和音)という。

コードは三要素内のハーモニーのほぼすべてを担うといっても過言ではない。

コードをうまく使うことで楽曲に厚みが増し、表情が付きやすい。

基本的なコードはスケール内の3音以上の音を使って作られる。

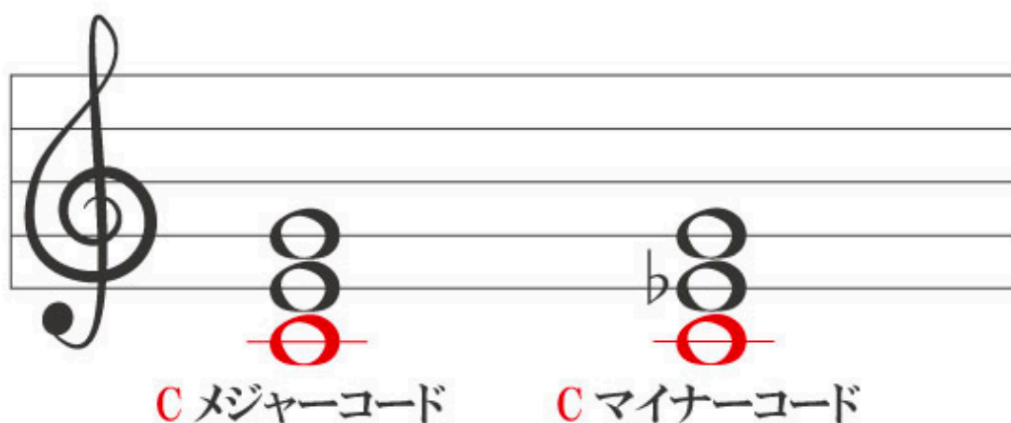
3音で作ったコードを三和音(トライアド)といい**メジャーコード**、**マイナーコード**がある。(スケール外の音を使うと2種類増えるが現在は無視して良い)

コードにもスケールのように一番下の音を接頭辞として付ける。(ex. A マイナー)

この一番下の音はルート(根音)と呼ばれ、そのコードが鳴っている間、ベースの音として機能する。(ex.コードが A マイナーの時、ベースは A を弾いていると綺麗)

C メジャー(Cmaj とも表記) : 構成音:C/E/G (ド・ミ・ソ)

C マイナー(Cmin とも表記) : 構成音:C/E^b/G(ド・ミ^b・ソ)



メジャーコードは明るく、マイナーコードは暗いです。

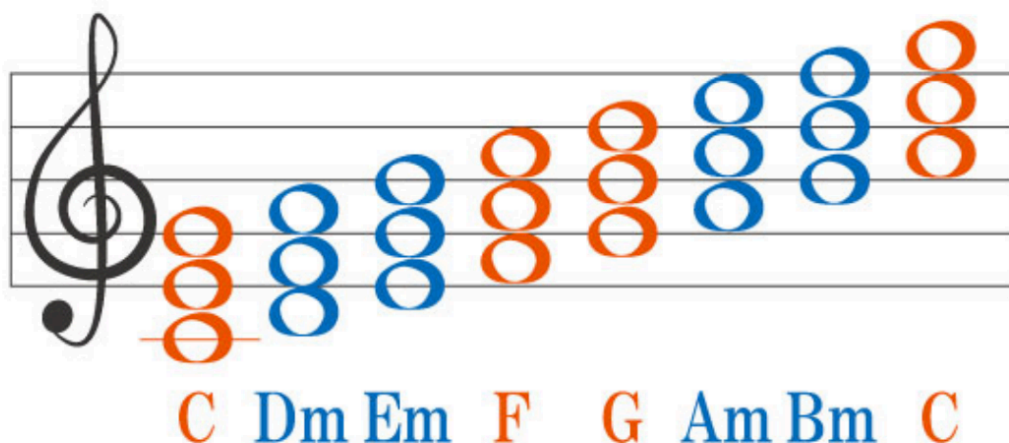
メジャーコードの真ん中の音を半音下げると、マイナーコードになります。

この2種類のコードをスケールに下から当てはめてつくられる6つのコードをそのスケール内の**ダイアトニックコード**といい、安定した道筋となります。

次項のコード進行も基本形はすべてダイアトニックコードのみから成ります。

Cメジャースケール上ではダイアトニックコードは **C,Dm,E,F,G,A,Bm** の6つです。

(6つ目の最後のコードには少し扱いが難しいのですが、ここでは便宜上 Bm とします)



Cメジャースケールは白鍵だけのスケールのため、ダイアトニックコードも白鍵からなるコードとなります。

5. コード進行

コードを1小節 or 2拍程度ごとに切り替えて流れを作ったものをコード進行といいます。

コードの並べ方にはある程度の規則性があるのですが、やや難しいのでこの講座では省略します。(気になる!という人は「トニック ドミナント サブドミナント」などで検索してみてください。)はじめはよく使われるコード進行を覚えて順序を入れ替えたり違うコードに入れ替えたりしてバリエーションを持たせると良いと思います。

以下のコード進行は Cmaj スケールおよび Am スケールにて考えます。

① 王道進行

F-G-Em-Am

J-POPなどでよく使われる進行で、どこかしらで耳にしたことがあるはず。

どんなメロディにも良く合い、応用の幅も広い

② 東方進行

F-G-Am-Am

上記の王道進行の3つめのコードを4つ目と同じにした応用系。

クラブミュージック・音ゲー曲・東方BGMなどに多くみられる。

ソフメでも一部で流行。

③ 小室進行

Am-F-G-C

小室哲哉が1990年頃に多用していた進行。

切ない感じとボーカルとの親和性などからこれもJ-POPによくみられる。

④ カノンコード

C-G-Am-Em-F-C-F-G

クラシック パッヘルベル作曲の「カノン」にて使われている進行。

応用が大変良く効き、メジャースケールで作られたメロディに良く合うのでこちらもJ-POPによく使われる。

さんざんコードの話をしてきましたが、どちらかといえば曲の自分らしさを作る面が大きいのはメロディですので難しいな、と思ったらまずはメロディやリズムから作り、ハーモニー関連の要素は後から考えましょう。

はじめはコードが付けられなくても何の問題もありません。